

釧路湿原自然再生協議会 再生普及小委員会
第15回湿原学習のための学校支援ワーキンググループ議事要旨

■日時：2022年8月5日（金）14:00～15:50

■場所：釧路地方合同庁舎5階 第一会議室

■出席者：（敬称略・順不同）

<専門家>

- ・高橋 忠一（再生普及小委員会委員長）
- ・境 智洋（北海道教育大学釧路校 教授）

<学校教員>

- ・釧路市立中央小学校 前田 進太郎、石川 慎吾
- ・釧路市立新陽小学校 柴田 康吉、大澤 純平
- ・釧路町立別保小学校 市橋 快斗
- ・標茶町立標茶小学校 福岡 徹

<学校教育行政機関等>

- ・釧路町教育委員会 教育部 指導主事室 室長 國井 彩子
- ・弟子屈町教育委員会 指導室 指導室長 武田 進一
- ・釧路湿原国立公園連絡協議会 事務局次長 元岡 直子、事務局員 松橋 由希
- ・釧路市こども遊学館 事務局長 小笠原 忍、学習担当 吉野 峻也

<ワーキンググループ事務局>

- ・環境省北海道地方環境事務所 釧路自然環境事務所 瀧口 さやか、岩下 美杜
- ・公益財団法人北海道環境財団 山本 泰志、安田 智子

■議事次第：

1. 開会
2. ワーキンググループの取組報告
3. その他
4. 閉会

■議事概要

1. 開会

《配布資料確認後、自己紹介》

2. ワーキンググループの取組報告

事務局より資料1について説明。各取り組みに関係する委員から補足の発言を得ながら、意見交換を行った。

1. 湿原を題材とした学習素材の収集、活用の促進

《動画資料に関する主な意見》

- ・ 釧路市立中央小学校 6 年生ではキャリア教育と湿原学習とをリンクさせた学習を行っている。環境教育だけではなく、さらに広げる、つなげるといったことができる分野だと思うので、お仕事紹介動画については活用が図れて大変有り難い。
- ・ 湿原を訪問できる回数が限られている中で動画などの教材があると大変助かる。湿原学習に入る前に動画を見ることで、子どもたちなりの発見があった。
- ・ 動画では目や耳から様々な情報が入って来るので、子どもたちに有効な情報があるだろう。
- ・ 取り組み課題3にも関わることだが、動画の活用やリモートでの授業など、効果的な素材が増え、活用方法の幅が広がったと感じている。
- ・ 一方通行の情報提供になりがちであり、質問箱やチャットのように質問が互いに見え双方向のやり取りができる仕組みがあると、より興味が深まり、相互作用ができるのではないかと。
- ・ 子どもたちの多岐に渡る課題や疑問に対して質問できる専門家情報などがあると有り難い。
- ・ 子どもたちは動画で紹介されている釧路湿原などの場所を身近な実際に行ける場所として捉えられていないところがある。マップで場所を示すなど、様々な情報をリンクさせることで、より身近でわかりやすい資料になる。

《キャリア教育における湿原の活用に関する主な意見》

- ・ 情報が溜まってくると探すことが大変になる。特定の職業の話聞く上でも、まず各職業の関連など全体の外観、例えば川に携わるものにはどんな職業があり、どんな仕事をしているのかを整理して捉えることで、子どもたちも頭の中で位置づけながら職業を理解していくことができる。キャリア教育を通して、いろいろな分野で子どもたちが外観を捉えることができれば、子どもたちにとって、価値のある身になるものになる。
- ・ 5年生で湿原に関わって様々な方がいるということを知り、6年生で実際の職業や人に話が広がっていくことは、つながりとしては大変面白い。そういうところに興味が広がっていくと、人との関わりがあり様々な職業の人が関わっているということを知ることができる。

2. 自然再生の学校教育への活用促進

《標茶小学校の取り組みに関する委員からの補足》

- ・ 1回目のフィールド訪問で様々なものに出会い、子どもたちの興味は多岐に渡る。現在は2回目のフィールド訪問で調べたいもの、観察したいこと、そのために必要なものを整理している段階。思うようにできないことがあっても、なぜできないのか考え、そこから広がっていくものと考えている。

3. 学校教員の関心喚起、湿原の教育的な価値の普及

《学校での取り組みに関する委員からの補足》

- ・ 釧路市立中央小学校 5年生では、沢山の疑問を持ち帰り、調べ、その中で興味を持ったものを子どもたちはテーマにしていく。2回目のフィールド学習で焦点化し、調べ学習を進めていく。
- ・ 総合学習の大きな目標の一つが自己の生き方を考えるということだが、釧路市立中央小学校 6年生では、「考える」ということにつなげるきっかけになるようなキャリア教育を行っている。5年生の湿原学習から広げていくかたちで考え、ビジターセンターのスタッフに話を伺った。仕事の内容だけではなく、人となりに関しても非常に興味を持って勉強をし始めている。
- ・ 釧路町立別保小学校 5年生では、実際に湿原に行き植物を触ったり匂いを嗅いだりして、子どもたちが事前に考えていたことから興味の幅が広がり、知りたいという気持ちも強くなった。
- ・ 標茶小学校でのこれまでの湿原学習をふりかえって考えると、学習を通して子どもたちの意識が変わり、自分で調べていくことで他の教科にも生かされてきて、勉強したことが身につけてきたと感じる。
- ・ 釧路市立新陽小学校 4年生では湿原学習で温根内を訪問し、最初は湿原って何だろうと言っていたが、実際にフィールドに行くことで意識が変わっていくことが顕著にわかった。そこからが始まりと考えており、見つけた課題を、どのように解決していくかに取り組んでいく。

《発表会のコーディネイト、学外での発表会の企画についての意見》

- ・ 関係機関として過年度の学習発表会に伺ったが、学習の目的や、現場の様子がよくわかり、また非常に刺激になった。
- ・ タブレットで中間発表を行った別保小学校では、助言に応じてその場で調べて発表原稿を直しており、発表会でのタブレットの活用は新しい試みだと感じた。
- ・ 中央小学校では中間発表会での助言を受けて次に見た際には内容がブラッシュアップされており、素晴らしいと思った。
- ・ 各学校でクオリティーに差があると感じた。学校間の交流等により、他の学校の発表を見てみることも必要だと感じた。
- ・ 釧路市子ども遊学館の展示では、大人にとっては今の湿原の状態を子どもたちの視点から生き生きと伝える大変良い機会になっている。就学前のお子さんを持つ保護者も沢山来られるので、小学校での学習を知るきっかけにもなっている。子どもにとっても、同世代の子どもたちが作ったものを、興味関心を持って見て興味を広げることが成果として得られたと思う。また、学校での単元が終わった後も沢山の不思議を家庭に持ち帰って継続して学べる環境を提供してあげたらと感じた。保護者に向けたアプローチなど、湿原学習のその先を考え、継続して子どもたちの探求心を深めていけるようなお手伝いが遊学館でできたらと思う。
- ・ 遊学館で研究発表ボードの展示を見た大人の興味の持ち方として3パターンあり、1つは湿原

そのもので子どもたちの情報に対して関心を持つ。2つ目は、研究発表ボードというツールに対して、3つ目は、子どもの取り組み方に対して。小学校の子どもたちも十分発信者として位置付くことが明確にわかった。現在は展示だけであるが、発表の機会やスタッフからのフィードバック等があると、より一層良いと感じた。

- ・子どもたちが調べまとめたものは誰に向けたものなのか、学校の学習の一環という形から抜け出して普遍的なやり方として考えられないだろうか。やりがいがあるような発表形態を考える必要があるだろう。
- ・今、学校だけではなく町や遊学館で紹介する一つの流れができており、次のステップとして研究を評価してあげたい。一つのプロセスとして最後は発表して次につなげていこうという流れになっていけば良い。子どもたちがワクワクするような最後の結末を作ってあげたい。

《議事全体に対しての意見》

- ・弟子屈町では屈斜路湖や摩周湖の学習が主で、釧路川つながりで学習の興味を広げると考えると、新たなものを立ち上げることは現場にも負担がかかる。例えば理科では川の学習で上流から下流の様子について学習するが、ZOOMを活用して中流、下流の学校と交流し、釧路湿原とのつながりを感じるということも考えられる。湿原そのものからアプローチするのではなく、身近なものから辿って行って視野を広げるという学習展開の方が自然な形で子どもの興味を喚起することができるのではないか。
- ・子どもたちの将来を考えた時に、知りたい、不思議だ、この人格好良い、大変だけど素敵だ、自分たちの地域にいて凄いい、といったことを子どもたち自身が感じ、だから大切にしよう、自信を持っていこう、自分の地元には誇れるものがある、頑張ってる仕事をしている人がいるといったことを、自分事として沢山感じることができれば、釧路に生まれて良かった、湿原に行けるところに住んでいて素敵だなとなっていくのではないかと思う。
- ・自然に関する感性についても人を介しており、人に惹かれたことがきっかけとなることも多い。様々な方に出会うことで、突然興味を持ったたり惹かれたりし、人を介することがどれだけ重要かということを感じた。
- ・釧路町では故郷教育を重点としている。故郷の良さを知るということを考える時に、まさに釧路湿原がそれに当てはまると考えている。今年度、町では子どもたちをノロッコ号に乗せて湿原を見学に行かせる事業を企画し、湿原学習を実施している別保小学校をマッチさせて一校目として実施した。この後は、町内全ての小学校で湿原を知る機会を皆に持ってもらうことを考えている。各学校が行っている環境学習としっかりマッチさせてねらいを持ち、教育委員会でも支援しながら授業や単元づくりの支援をしていきたいと考えており、湿原学習のコーディネイトをより多くの学校でやってもらい、別保小学校のような活動を全ての学校に体験させたい。
- ・調べ学習をしていく中で、どのように興味を持って深く調べるかという手法的な部分と、調べたことを誰に伝えていくかという出口の部分に課題がある。発表に際して、各学校と関係機関をつなげて同じ興味を持っている学校の人たちに調べたことを発表していくことは、お互いに大変良い刺激にもなるし、やる気を喚起する部分にもなる。相手に寄り添い思いを伝えたいということが大事な要素であり、様々な興味の中で子どもたちの学びは広がると思うので、そういったところがつながっていくと、このワーキンググループの目的にもつながると思う。
- ・子どもに探求する力をつけさせたい。北海道の子どもたちは探求する力がとても弱い。探求の

プロセスを学んでいかないと、北海道も日本も駄目になってしまう。探求するということの大切さを学校教員が教えなければいけない。小学校では様々な力をつけながら、調べることを広げていくような助言を先生方がしてあげられると良い。どうしても調べられなかったことの中から課題が見つかっていく。生活科からつながってくる子どもたちの気づきを膨らませてあげ、それを研究発表ボードにまとめて、ここまでわかったということが小学校。中学校ではその課題を元に学習につなげていけば良い。今、中学校に学習が繋がらないことが課題だが、小学校の中で課題を作る過程を学んでいくということを大事にしてあげると良い。

- ・ 標茶小学校は取組みを始めて今年で6年目。子どもたちの課題がどんどん変わっていく。最初はインターネットで調べたことをボードに貼っていたが、自分の課題を出して発表するようになってきた。他の学校でも子どもの課題を上手く引き上げられるようになっていけば、変わってくると思う。先生方が負担にならないように子どもたちと一緒に調べ、子どもたちの研究を上手く進めてあげていけば、良い探求の力を学んでいくのではないかなと思う。
- ・ 小学校、中学校を通して、川の学習に流域の概念が抜けている。流域の町に降った雨が全て釧路川に集まり、その間にある湿原が水を蓄えてくれている。釧路川も釧路湿原も合わせたサイエンスフェアとして、釧路川と釧路湿原で研究している子どもたちが一同に集まり、研究内容を発表しあえる場ができたら良いと思う。1つのツールとして研究発表ボードを使うことで、釧路の子どもたちの探求力が少しずつ上がっていくのではないかな、国語や算数だけではなく、こういう力をつけていくことも大事だと思っている。最後に科学の拠点はやはり遊学館。遊学館に皆で集まって盛り上がっていく。そういうことができたら良いなと考えている。

3. その他

事務局より、釧路湿原自然再生事業に係る関連情報として、釧路市立中央図書館での関係資料の収蔵、カヌーガイドライン（改訂版）について周知した。

4. 閉会